

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



35

よろこびの知らせ  
第35集

目 次

|                 |    |
|-----------------|----|
| これ以上の愛はない ..... | 1  |
| ローマ 5:6-11      |    |
| 失くならない希望 .....  | 10 |
| ローマ 5:1-5       |    |
| まことの宗教 .....    | 19 |
| ヤコブ 1:26-27     |    |
| 導きの神 .....      | 29 |
| 詩篇 23:1~6       |    |

ここに収められたメッセージは、2022年7~8月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

# これ以上の愛はない

ローマ 5:6-11

5:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。

5:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。

5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

5:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

5:10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

5:11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。

礼拝の締めくくりに宣言される「キリストの恵み」、  
「神の愛」、「聖霊の交わり」にはどんな意味があるのかを学んでいます。きょうは、「神の愛」についてご一緒に考えてみましょう。

## 一、四種類の愛

「愛」といっても、さまざまな種類の「愛」があります。ギリシャ語では、「愛」を表すのに4つの言葉が使われます。最初の言葉は、「エロース (ερως)」で、これはギリシャ神話の「愛の神」の名前から来ています。ギリシャ神話によると、人間はかつて頭が2つ、手が4本、

足が4本ありました。神々がそれを、真っ二つに裂き、頭が一つ、手足が2つずつの男と女にしました。それで、いずれの半身も他の半身に憧れ、再び一緒になろうとする。その熱情が「愛」（エロース）であるということです。ギリシャ神話の「愛」は「男女の愛」のことです。現代も多くの人が「愛」と聞くと、まず「恋愛」のことを考えるでしょう。恋愛の物語は、時には美しくありますが、男女の愛は自分を満足させるだけの利己的で醜いものになる場合もあります。それで仏教では「愛」という言葉は「特定のものにこだわること、貪（むさぼ）ること」という意味で使われ、それは「貪愛（どんあい）」と呼ばれ、悟りを妨げるものとされました。聖書では、この言葉は使われません。

2つ目の言葉は「ストルゲー（στοργη）」です。これは親子や兄弟の間の愛、肉親の愛、家族の愛を意味します。この愛は自然なもので、必要なものです。しかし、血縁が権力と結びつくと、一族以外の民衆が苦しめられます。

それで、今日では、同じ意見を持つ人たちが政党を作り、民主国家では複数の政党が選挙で競い合って政治をするようになりました。そのように、血縁でなく人々を結びつけるもの、それが「愛」を表す3つ目の言葉、「フィリア（φιλία）」です。「友情」、「友愛」という意味があります。聖書では、動詞の形（φιλεω）で、人が何かを「好む」ことや、人が他の人を「愛する」、「親しくなる」ことを表します。

「フィリア」は「ストルゲー」よりは広い愛を表しますが、たとえ、血縁でつながっていなくても、仲間内の者だけを信頼したり、かばったりすれば、社会の正義が踏みじられてしまいます。日本では、ある事件があつてから「忖度（そんたく）」という言葉が盛んに使われるようになりましたが、「忖度」というのは、「フィリア（友愛）」の名のもとに、権力者に媚びて自分の身を守ることです。それはほんらいの「友愛」から遠く離れたものです。人間の愛は、どれも完全なものではなく、本来は良いものまでが、罪のためにゆがめられてしまっているのです。

しかし、神の愛は、人間の愛のように不完全なものではありません。この神の「愛」を表すのが、第4番目の「アガペー（αγαπη）」という言葉です。これは、それまであまり使われることがなかったのですが、聖書では、人の愛に優る神の愛を表すために、この言葉が使われるようになりました。それで、神の愛は「アガペーの愛」と呼ばれるようになりました。

## 二、四次元の愛

神の愛、「アガペーの愛」と人の愛、「フィリアの愛」とはまったく接点がないわけではありせん。もし、そうなら私たちは神の愛を知ることができませんし、神を愛することができないわけです。しかし、神の愛と人の愛には4つの面で違いがあります。エペソ 3:18-19に「すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人

知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように」とありますが、神の愛と人の愛とは、その「広さ」と「長さ」、「高さ」と「深さ」において違いがあるのです。

では、愛の「広さ」とは何でしょう。それは、愛の対象の広さだと言ってよいでしょう。人の愛の範囲は案外狭いものです。自分の家族、仲間には良くすることはあっても、それ以上の広がりがないのです。イエスは、私たちに「自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか」（マタイ 5:46-47）と言われました。私たちは、イエスが言われた通りの、狭い愛しか持っていません。しかし、神は「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださる」お方です（同 45 節）。神の愛は民族、国境を越えています。これが神の愛の「広さ」です。

次に、愛の「長さ」とは、その愛が時間がたっても変わらないことを指しています。私たちの愛は変わりやすい愛です。きのう愛したかと思えばきょうは憎むという場合があります。いや一日のうちでさえ、ころころと変わるかもしれません。しかし、神の愛は永遠に変わらない愛です。エレミヤ 31:3 で、神はこう言われました。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆ

え、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」

人は誰も愛を必要としています。人は誰かに愛されてはじめて生きていくことができ、誰かを愛してはじめて生きる意味を持つことができます。人は愛なしには生きていけませんから、誰かの愛を求めます。とくに苦しみの日にはそれを求めます。しかし、人の愛には限りがあり、すべての愛が純粋ではありません。それがつかの間の愛、不純なものでしかなくても、人はそうしたものにしがみつき、やがてそれが破綻して、大きな苦しみを味わうこともあるのです。

私は、子どもころ、肉親の死を体験しました。どんなに自分を愛してくれる人がいても、その人はやがて世を去っていく。人の愛は長くは続かない。そんなことを子どもながらにも感じていました。そして、高校生になって聖書を読み、変わらない愛があることを知りました。神を愛して生きることには人生の意味を見出しました。私は神の愛を見出すことができ幸いでした。多くの人にこの幸いを得て欲しいと心から願っています。聖書の真理はとても深いものですが、決して難しいものではありません。子どもたちもサンデースクールで神の言葉を学んで理解することができます。聖書のメッセージを凝縮すれば、「神はあなたを愛しておられる」となります。この愛を知り、伝えたいと思います。

3番目の愛の「高さ」とは、神の愛の「気高さ」や「純粋さ」のことです。別の言葉で言えば「無条件の愛」ということです。人間の愛は、どこかに条件があります。

最近の日本の女性は結婚相手に「高学歴・高収入・高身長」の男性を希望すると聞きました。「あなたは私の条件にかなっているから愛してあげる」というわけです。ある人がこういう愛を「『だから』の愛」と呼びましたが、本当の愛は「『だから』の愛」であってはならないと思います。

また、「もし、こうだったら愛してあげる」と言って、相手に自分の条件を押し付ける「『もしも』の愛」もあります。もし、親が自分の子どもに、「良い子にしていたら愛してあげる」、「成績が良くなったら愛してあげる」というメッセージを送り続け、親の期待だけを押し付けるなら、子どもは親に受け入れられていないと感じます。親の前では良い子を演じて、実際は、親に反抗し、親の期待を裏切ってしまうことがあります。本当の愛とは、あるがままの相手を受け入れることにあります。そうした愛を受けた人は、大人であっても子どもであっても、必ずその愛によって変えられていきます。

私たちは、皆、神の無条件の愛で愛されています。神の愛は「『だから』の愛」ではありません。私たちは、神に愛される条件のどれ一つも満たすことができません。なのに、神は私たちをあるがままに受け入れてくださったのです。また、神の愛は「『もしも』の愛」でもありません。たとえ、信仰において成長し、神のために良い働きをしていたとしても、神の目から見れば、まだまだおぼつかない者であり、ほんのわずかなことしかできていないのです。もし神がご自分の基準を厳しく要求

されるとしたら、私たちはたちまち、神の愛から除外されても同然です。神は、私たちの成長を期待しておられることは間違いありませんが、それは決して「こうでなければ、お前を愛さない」というものではないのです。条件にかなわない者さえも愛し、私たちがみこころに添えない者であるにもかかわらず、神は、私たちを受け入れてくださる。私はこれを「『にもかかわらず』の愛」と呼んでいます。この神の愛が、私たちをみこころにかなう者へと変えてくれるのです。

最後に、愛の「深さ」ですが、これは、神が私たちを愛し、受け入れるために払ってくださった犠牲の大きさのことを指しています。愛は決して言葉だけのものではありません。本物の愛には必ず「犠牲」が伴います。子どもたちは、親が子どもを育てるためにどんなに犠牲を払っているかが分からないので、わがままなことを言いますが、自分が子どもを持つようになれば、きっと、親の苦勞が分かるようになるでしょう。誰かを愛するようになれば、その人のために何かを犠牲にしなけれならなくなりますから、愛に犠牲が伴うことが分かるようになるでしょう。

神は私たちを愛されました。私たちの罪を赦し、ご自分の子どもにしようと願われました。しかし、それは犠牲を必要とします。犠牲なしには罪が赦されることはないからです。しかも、全人類を罪から贖うためには、最高の犠牲が必要です。そして、神は、それを実行なさったのです。ご自分の最愛の御子イエス・キリストを十字

架に引き渡されたのです。イエス・キリストもまた、進んでご自分の命を差し出されました。イエスは言われました。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」（ヨハネ 15:13）イエスが「友」と呼んだのは、やがてイエスを裏切り、見捨てるであろう弟子たちのことでした。イエスは彼らの師であり、主であるのに、彼らを「友」と呼んでくださったのです。また、この「友」には、イエスを十字架にかけ、あざけり、ののしった人々も含まれています。彼らはイエスの「敵」でした。「敵を愛せよ」と言われたイエスは、自分を十字架につけた「敵」を、ほんとうに愛し、その愛によって「敵」を「友」に変えてしまわれたのです。

きょうの箇所の8節にこうあります。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」また10節では「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」神は「罪人」であり、「敵」であったものさえも、最高、最大の愛で愛してくださいました。これほどの愛は、神の愛以外、どこにもありません。そして、この神の愛の届かないところはどこもないのです。

私は、2009年、長崎に行き、永井隆医師の記念館を訪れました。永井氏は原爆の投下点からわずか700メートル

のところで被爆し、自分の身体が放射能で蝕まれているにもかかわらず、他の被爆者の救護にあたった人です。その記念館に、彼が書いた「どん底に大地あり」という色紙がありました。彼ほど、どん底にまで突き落とされた人はいないでしょう。しかし、神を知る彼は、そこにも神の愛が届き、自分を支えてくれている。「どん底に大地あり」の「大地」は、彼にとっては神の愛でした。彼はこの愛を確信して、人々に仕えきって生涯を終えました。

神は、私たち一人ひとりを愛しておられます。もうこれ以上はないという広く、長く、高く、深い愛で愛しておられます。この愛を受け、この愛に憩う人には、「どん底」はないのです。私たちはどんな中でも、どこまで行っても、神の愛の中で歩み、それによって生きるのです。

### (祈り)

父なる神さま、私たちがあなたに罪を犯し、あなたに逆らっていた時にさえ、あなたは私たちを愛してくださいました。あなたの愛は、私たちの思いをはるかに超えています。あなたはその愛をイエスによって示してください、私たちが見て、触れて、体験できるようにしてくださいました。日ごとに、また、礼拝のたびごとに、あなたの大きく高い愛を見上げ、変わらない深い愛に信頼できますよう、導いてください。イエス・キリストのお名前です。

# 失くならない希望

ローマ 5:1-5

5:1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。

5:3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、

5:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。

5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

ユダヤの人々がナチスに苦しめられたとき、ある人たちは屋根裏や戸棚の裏に作られた隠れ部屋に籠もって難を逃れようとしていました。そんな隠れ家で、ある一家が「過越」を守ろうとしていましたが、キャンドルがなかったので、代わりにバターを燃やしました。それを見た子どもはバターを惜しみました。そのとき父親は言いました。「バターが無くても人は生きていける。けれども、救いの希望を失ったら、人は生きていけないのだよ。」父親は、先祖たちが「過越」によってファラオの手から救われたように、自分たちのためにもホロコーストから救ってくれる「過越」の時が来るとの希望を子どもに教えたのです。人々はその希望によって、あの苦しみの時を乗り越えたのです。

コロナ・ウィルスの蔓延から始まって、世界は今、ウクライナでの戦争、インフレーションやリセッション、食糧やエネルギーの危機に見舞われています。アメリカでは不法移民とそれに伴う麻薬や不法な銃器の流入、人身売買、治安の悪化などの問題があります。そうした中で私たちはつい悲観的になりがちですが、信仰を持つ者は希望を失ってはいけないと思います。終わりの時代には困難な時がやって来ます。それは定められたことですが、しかし、その中でも、福音は世界中に宣べ伝えられ、希望を失わない者には救いがもたらされるのです。

私たちは「祝福宣言」の「キリストの恵み」と「神の愛」についてすでに学び、きょうは「聖霊の交わり」をとりあげますが、じつは、この「聖霊の交わり」が私たちに希望をもたらすのです。そのことをご一緒に考えてみましょう。

## 一、神との交わり

「聖霊の交わり」とは何でしょうか。「聖霊との交わり」であると言う人もあります。もちろん聖霊が私たちの内に住まわれることによって、私たちは聖霊との交わりを持つのですが、イエスが「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです」（ヨハネ 16:14）と言われたように、聖霊はご自分を隠して、父なる神やイエス・キリストの栄光を現そうとされます。私たちをキリストとの交わりに導き、キリストは私たちを神との交わりに導かれるのです。ヨハネ第一 1:3 に「私たちの交わりとは、御父および

御子イエス・キリストとの交わりです」とある通りです。「キリストの恵み」が「キリストがくださる恵み」であり、「神の愛」が「神がくださる恵み」であるように、「聖霊の交わり」も「聖霊がくださる交わり」という意味になります。ですから、「聖霊の交わり」は、聖霊がくださる神との交わりのことだと言ってよいでしょう。

では、聖霊による神との交わりはどのようにして私たちのものとなるのでしょうか。それは「罪の赦し」によってです。「交わり」をギリシャ語で「コイノニア」（κοινωνία）と言いますが、これには「共有」という意味があります。互いに同じものを持つ、シェアし合うということですが、しかし、聖なる神と罪深い人間のどこに共有できるもの、共通点があるのでしょうか。ほんらいは、どこにもないのです。しかし、イエス・キリストが私たちの罪を背負って十字架で死んでくださったことにより、罪の赦しが与えられ、神と人との交わりの接点が、共有点が生まれたのです。

この罪の赦しを得るためには、まず、自分の罪を認めなければなりません。ヨハネ第一 1:6-7に、こう書かれている通りです。「もし私たちが、神と交わりがあると言っていないながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なっていない。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをき

よめます。」平気で罪を犯し続けている人も、「私には罪なんかない」と自分の罪を認めない人も、神との交わりを持つことができません。神との交わりは自分の罪を認め、それを赦していただくことから始まります。ここに希望への第一歩があります。

罪の赦しを受けた人は、神との平和を得ます。きょうの箇所に「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています」（1）とあります。この「平和」、「平安」は、たんなる「気休め」でも、見せかけのものでもありません。罪を赦され、神との交わりに入れていただいた、本物のたましいの「安らぎ」です。

そして、この「平安」から「喜び」が生まれます。2節に「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます」とある通りです。この喜びは、苦しみの嵐が吹けばすぐに消えてしまうような喜びではありません。いやむしろ、患難さえも喜ぶ、消えることのない喜びです。初代のキリスト者は、正しい生活をし、善い行いに励んだのに、イエスが苦しみを受けたように、その信仰のゆえに苦しめられました。ローマ帝国では三百年にわたる迫害がありましたが、それでキリスト者が減っていき、ついに根絶やしになったのでしょうか。いいえ、逆にどんどん増えていき、福音はローマ帝国の隅々にまで、また、国境を越えて世界にまで届けられました。ローマ皇帝の身近な人々も次々とキ

リスト者になりました。

なぜでしょう。それは、信仰者たちが希望を失わなかったからです。ローマ 5:3-4 にはこうあります。「それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」ここには

「患難」→「忍耐」→「品性」→「希望」

という法則があります。これは「希望の方程式」と呼ばれています。もし、私たちに罪の赦しに基づいた「神とのまじわり」がなかったら、「平安」も「喜び」もありません。大きな患難が来れば、忍耐を失くし、慎みや品性などを保つことができなくなります。悲観したり、人を恨んだり、批判したり、疑い深くなったりしてしまいます。軽はずみなことをして、さらに悪い結果をもたらしたりします。最後は失望、落胆、絶望で終わるのです。しかし、キリストを信じる者は違います。「患難」から「忍耐」が生まれ、「忍耐」によって「品性」が磨かれ、磨かれた「品性」から「希望」が出てくるのです。「希望の方程式」の通りです。この方程式は、頭の中から出たものではありません。パウロ自身の体験に基づいています。数多くの信仰者によって実証済みです。私たちも、これに従うなら、患難から希望を得ることができるのです。

この方程式が実現するためには、私たちに信仰が必要です。しかし、患難から希望を得るのは、私たちの力によってではありません。聖霊によってです。5 節にこうあ

ります。「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」人間的なものだけの希望は、いつか失望に終わることが多いものです。しかし、聖霊が私たちの心に神の愛を注ぎ続け、生み出してくださる希望は、決して失望に終わりません。ですから、「希望の方程式」は、少し変えて、次のように書くことができます。

「患難」→「忍耐」→「品性」→「希望」∞

「∞」は「無限大」の印です。聖霊の交わりによって生まれる希望は失くならないのですから「無限大」なのです。「キリストの恵み」、「神の愛」、「聖霊の交わり」が宣言される時、私たちも信仰をもって「アーメン」と答えたいと思います。

## 二、互いの交わり

聖霊がくださる「交わり」、それは何よりも「神との交わり」ですが、そこには「神との交わり」に基づいた信仰者の互いの交わりも含まれています。ペリピ 2:1-2 に「こういうわけですから、もしキリストにあつて励みがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください」とあります。ここでの「御霊の交わり」は、聖霊が生み出してくださる互いの交わりを指しています。

### 三、分かち合いの交わり

聖霊がくださる「交わり」には、さらにもう一つあります。それは、互いに持っているものを分かちあう交わりです。「交わり」と訳されているもとの言葉「コイノニア」は、新約聖書には17の箇所に出てきます。その最初が使徒2:42です。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」とあります。ここでの「交わり」は、信仰者が共に集まり、共に学び、共に祈り、共に働くことと共に、持ち物を分け合うことも意味しています。これに続く箇所に、「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた」（使徒2:44-45）とある通りです。

エルサレム教会でのこうした共有生活は、ユダヤ人からの迫害という特別な状況のもとで行われたもので、ずっと続いたわけではありませんが、信仰者が実際的な必要を分かち合い、助け合う、「分かち合いのまじわり」は、「献金」という形で続けられました。実際、聖書では「献金」のことが「コイノニア」と呼ばれています。ローマ15:26に「それは、マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醵金することにしたからです」とありますが、ここで「醵金」と訳されている言葉は、原語では「コイノニア」です。他に、コリント第二8:4の「聖徒たちをささえる交わりの恵み」、コリント第二9:13の「惜しみなく与

えていること」、またヘブル 13:16 の「持ち物を人に分けること」などといった箇所では「コイノニア」という原語が使われています。

聖書でいう「交わり」が、「献金」や持ち物の分かち合いを指す言葉として使われているのは、とても興味深いことです。このことは、聖書が教える「交わり」が、言葉だけのものでなく、形となって現れるものであることを教えています。ピリピの教会は、パウロの伝道によって生まれたマケドニアでの最初の教会でした。パウロとピリピの教会は信仰的な「交わり」を持っていましたが、それが形となって現れ、「分かち合いの交わり」も持っていました。

ピリピの教会は、パウロがマケドニアを離れてアカヤに伝道していったときも、パウロを援助し続けました。ピリピ 4:14-16 で、パウロはこう言って、ピリピの信徒たちに感謝しています。「それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくれました。ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニアを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれました。」聖霊が私たちに与えてくださる「交わり」は、何よりも「神との交わり」であり、霊的、信仰的なものです。しかし、それは、必要などときには、「分かち合いの交わり」と

なって、目に見える形で現れ、ピリピの教会がパウロの宣教を支えたように、神の働きのために大きく用いられるのです。

「イエス・キリストの恵み」、「神の愛」、「聖霊の交わり」。この祝福の宣言を聞くたびに、「イエス・キリストの恵み」によって罪を赦され、救われていることを喜びましょう。限りない「神の愛」を受け、神の子どもとされていることを感謝しましょう。そして、聖霊が、私たちが神とキリストとの交わりに導き、私たちが神の愛のうちに歩み続け、やがての救いに入ることができるという希望を持ち続けましょう。この希望がある限り、この不安な時代にあっても、私たちは支えられ、神からの使命を果たすことができるのです。そのことを信じて、今週も一歩を踏み出しましょう。

### (祈り)

父なる神さま、あなたは聖霊によって、私たちがイエス・キリストとの交わりに導き入れ、それによってあふれる恵み、祝福を注いでくださいました。私たちもまた、信仰によって、あなたとの交わりにとどまり、あなたにある交わりを保つことができますよう、助けてください。そして、私たちのあなたとの「交わり」に、また、私たちのあなたにある「交わり」に、さらに多くの人々を加えてください。キリストのお名前です。祈ります。

## まことの宗教 ヤコブ 1:26-27

1:26 自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。

1:27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。

### 一、宗教とは

今月初め（2022年7月8日）、日本の元首相が銃で撃たれ、亡くなりました。容疑者は「統一協会」という宗教団体によって一家が破綻したため、その団体を憎み、それと関わりのあった元首相を狙ったと自供しています。この事件は間違った宗教がどんなに人の人生を狂わせ、犯罪をもたらし、社会を不安に陥れるかを物語っています。この人のしたことは決して許されることはありませんが、彼もまた、間違った宗教の被害者であったと思います。

統一協会は文鮮明（ムン・ソンミョン）が1954年に始めたもので、自分をキリストの再来であると主張していました。彼は「国際勝共連合」というものを作り、共産主義に反対する政治家と結びつき、勢力を伸ばしました。彼は本部をアメリカに移し、アメリカのメディアを買収しました。その資金の多くは日本で「靈感商法」という詐欺によって得たものでした。彼が主催した「合同結婚式」もまた、問題だらけのものでした。彼は1982年

に脱税の罪を犯し、アメリカで刑に服しています。文鮮明は2012年92歳で亡くなりましたが、後継者によって今も、活発に活動しています。

統一協会はキリスト教ではありませんが、一般の人々にはそんなことは分かりませんので、普通の教会までも怪しまれました。日本では、他にも「モルモン教」や「ものみの塔」も盛んに活動していますので、日本の多くの教会は「私たちは正統的なプロテスタント教会で、モルモン教、ものみの塔、統一協会と関係はありません。これらのことでお困りの方はご相談ください」と教会案内に書くようになりました。

1995年に「オウム真理教」が「世の終わり」を演出するため、地下鉄サリン事件を起こしてからは、多くの日本人に「宗教は怖いもの」という観念が植え付けられました。そのため、その時以来、日本では福音の伝道が停滞しています。これはとても残念なことです。

英語で「宗教」は“religion”ですが、この言葉はラテン語で「結びつける」という意味の言葉から生まれたとされています。最初の“re”は、「強く」という意味ですので、“religion”は、「人が神にしっかり結びつく」という意味になります。そこから、「信心深いこと」や「礼拝」、また、「宗派」などを表すのに使われるようになりました。

宗教とは、ほんらいは、神と人とを結ぶもの、また、人と人とを結ぶものです。人は、まことの神によって造られましたから、すべての人は、神に結ばれてこそ、生

きる意味や目的を見出します。また、人は、他の人と健全な関係を持つことによって幸いな人生を送ることができます。それを与えるのが宗教です。しかし、その宗教が人をまことの神ではなく偽りの神々や、邪悪な人間、組織、制度、戒律に結びつける、いや、縛りつけるものであるなら、確かに、そうした宗教は恐ろしいものになってしまいます。多くの人は間違った宗教を見て、どんな信仰も否定し、無神論者、唯物論者、世俗主義者になるのです。ある統計によると現在、世界人口の30パーセントがクリスチャンで、ムスリムと無神論者がそれぞれ15～16パーセント、残りが仏教や諸宗教です。クリスチャンが減り、無神論者が増えていると言われていません。

間違った宗教、偽物の信仰があるということは、ほんとうの宗教、正しい信仰があるということを教えています。どんなものでも本物があるから偽物が生まれるのです。ほんとうの信仰は知性を退けません。私たちは、知性を働かせ、本物と偽物とを区別し、まことの宗教、正しい信仰に立ちたいと思います。

## 二、誤った宗教

では、正しい宗教と間違った宗教を区別するにはどうしたらよいのでしょうか。世界には数え切れないほどの宗教があり、すべてをとりあげることができませんので、きょうは、さきほど名前をあげた「モルモン教」、「ものみの塔」、「統一協会」などを念頭において話します。

間違った宗教は、当然のことですが、それが立っている教えが間違っています。聖書を使ってはいても、聖書が教えることに従わないのです。聖書以外の「教典」があって、それが聖書よりも権威があるのです。たとえば、モルモン教の場合、この宗教を始めたジョセフ・スミスが書いた『モルモン教典』が、旧約、新約に続く第三の聖書になっています。ものみの塔は、自分たちの教義に合わせて訳した聖書、『新世界訳』しか認めず、しかもそれは、組織が定めた解釈にそってしか読むことができません。「人間の解釈」が「神の言葉」よりも権威があるのです。統一協会の教典は文鮮明が書いた『原理講論』で、そこにはアダムとエバの堕落に関する荒唐無稽な物語が書かれています。聖書を神の言葉と信じ、ただ一つの最高の権威として認めることがなければ、このような「作り話」が果てしなく生まれ、人々を惑わすのです。

聖書の教えで一番大切なことは、「イエス・キリストがどのようなお方であるか」ということです。イエスは弟子たちに「人々はわたしをだれだと言っていますか」と質問しました。弟子たちは「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます」と答えました。イエスはそうしたことを聞いた上で、もう一度、弟子たちに尋ねました。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが弟子たちを代表して答えました。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」（マタイ 16:16）

イエスはこの告白の上に教会を建てると言われました。人はこの告白によって救われます。この告白を持たない教会は本物の教会ではありません。モルモン教も、ものみの塔も、統一協会もイエスを神の御子とは認めていません。ヨハネ第一 4:1-3 にはこう教えられています。「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。」これは一世紀に書かれた言葉ですが、今の時代にはもっと切実なものとなっています。

間違った教えについては、すこし考えればその間違いが分かるのですが、異端的な宗教は、人々に考えさせないようにします。とくに統一協会では、若者を家族や社会から隔離し、集団生活をさせて管理し、洗脳します。若者たちは、組織の言うがままに、安っぽい壺や置物、あるいは印鑑などを高額で売りつける詐欺行為をしても、まったく罪悪感を持たず、かえって、それが「世界を救う」のだと信じ込んでしまうのです。

私の知り合いの牧師が統一協会から若者を救い出すために働いていましたので、日本にいたとき、少しばかり

手伝ったことがあります。そのとき「洗脳」の恐ろしさを目の当たりにしました。多くの人の祈りと努力によって若者たちが理性を取り戻し、正しく神を信じ、家族のものに返って行くのを見ました。そのうちの何人かが神学校に入って牧師になりました。どんなに世の中に偽りが満ちても、なお、神の真理の光が消えていないことを、感謝したことでした。

また、偽りの宗教では「教祖」と呼ばれる人が、絶対的な権限を持っていて、その組織を思いのままに動かします。そうした「教祖」たちは、きまって「神から示された」、「神から使命を受けた」と言うのですが、実際は自分の願望、計画を成就させるために、信者や他の人々を利用しているに過ぎないのです。こうしたことは宗教団体だけでなく、さまざまな団体で起こることです。「人権団体」を名乗っている組織の責任者が人々から集めたお金で、カリフォルニアに家を4軒も買っていた、しかも、その一つはプライベート・フライトのための滑走路まであったということがニュースになりました。そうしたことは、まさに、人々の善意を裏切る行為です。

もし、宗教者が同じようなことをするなら、それは人を裏切るだけでなく、神をも裏切ります。最初は正しい動機で始めたことでも、教会が大きくなり、牧師が有名になると、まるでセレブ気分になってあちらこちらで高い講演料を受け取ってスピーチをするようになり、その語ることが福音から離れていった人を、私は何人か知っ

ています。それは、イエスに従う人の姿ではありません。それは伝道ではなく「宗教ビジネス」です。そういうことがあるために、人々が信仰から離れていくのです。そういう人たちが「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか」と言ったとしても、イエスは、その人にこう言われるでしょう。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」  
(マタイ 7:22-23)

### 三、正しい信仰

偽りの宗教、誤った信仰には、他にも多くの特徴があります。きりがありませんので、次に、聖書が教える「まことの宗教」について学びましょう。

ヤコブはこう言っています。「自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。」(26節)「自分の舌にくつわをかけず」というのは、たんに「おしゃべり」だということではありません。ヤコブ3章に「舌」を制御することの難しさが書かれています。そこに「多くの者が教師になってはいけません」(3:1)と戒められています。これは、その戒めに関連しています。人は少し物知りになると他の人に教えたがるようになります。しかし、しっかりした訓練を受け、他から学ぶ謙遜さを持たないで「教師」になってしまうと、語ってはならないことや語らなくてよいことま

で口にして、聞く人を惑わせたり、躓かせたりしてしま  
います。そうしたことを反省し、悔い改めないままに  
「教師」を続けると、いつしか間違った教えを説くよう  
になってしまいます。自分だけが神の言葉を聞いている  
と考えるのは危険です。本物を正しく信じている人は、  
神は、自分に語りかけてくださるように、他の人にも語  
りかけてくださり、他の人を通して自分を教えてくださ  
ることを認めます。謙虚に、それに耳を傾けます。

次に、まことの宗教は人々に仕えるものです。27節は  
「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、  
やもめたちが困っているときに世話を…することです」  
と教えています。「みなしご」と「やもめ」は、聖書で  
は、社会的に弱い人々を代表しています。旧約聖書には  
くりかえし、「みなしご」や「やもめ」を保護すべきこ  
とが命じられています。それは、神が「みなしごの父、  
やもめのさばき人」だからです（詩篇 68:5）。本物の信  
仰を持った人たちは、神の愛を伝える宣教と、それを示  
す福祉の働きを、世界の各地で進めてきました。日本で  
孤児院を作り、ライ患者のために働き、戦後の1953（昭  
和33）年まであった遊郭から女性たちを救済したのは、  
みな、クリスチャンでした。今でこそ仏教の人たちも加  
わるようになりましたが、自殺防止の「いのちの電話」  
や尊厳死のための「ホスピス」もみなクリスチャンの働  
きでした。日本では数少ないクリスチャンがそうしたこ  
とをしてきたのです。日本には、「福祉」を看板に掲げ  
ている政党を持っている大きな宗教団体があるのです

が、その団体が弱い立場にある人たちのために何かをしたとは、少しも聞きません。ある人を病院にお見舞いに行ったとき、その団体の会員が、同じ会員で病気になった人に対して「おまえが病気になったのは信心が足りないからだ」と責めているのを見たことがあります。その時、愛のない宗教はほんとうの宗教ではないと思いました。

そして、本物の信仰は「この世から自分をきよく守る」ものです。「愛」と共に「聖さ」がまことの宗教の特徴です。聖書は「従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい」（ペテロ第一 2:15）と教えています。「聖い」といってもそれは、たんに「とりすましている」ことや「敬虔ぶる」ことではありません。本物の愛が「聖い愛」であるように、本物の「聖さ」は「愛にあふれた聖さ」です。それは、人を退ける冷たいものではなく、人を引き寄せる温かいものです。そのような聖い愛、温かい聖さは、イエスのうちにあり、そのお姿に表れています。つねにイエスを見上げ、イエスに倣う者でありたいと思います。

### （祈り）

父なる神さま、偽りの満ちたこの世で、信仰者までもが、間違っただけに傾いてしまいかねない時代となりました。あらゆる面で物事を正しく識別することが必要で

すが、最も大切な信仰の面で、正しくあることができますよう、私たちと、人々を教え、導いてください。愛をもって真理を語ることで、まことの信仰を証しすることができるよう、助けてください。主イエス・キリストのお名前です。

## 導きの神 詩篇 23:1-6

23:1 【ダビデの賛歌】主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。

23:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

23:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。

23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。

23:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

今年の年間聖句は詩篇 23 篇です。全員が1 節から 6 節までの全部を覚えて、暗誦できるようになりました。せつかく覚えましたが、いろいろな時に、この詩篇で主を賛美し、また、自らに語りかけるようにしてみましよう。

### 一、人生の導き

詩篇 23 篇には人生の情景が書かれています。そこには「緑の牧場」があり、「いこいの水のほとり」があります。そこで私たちのたましいは「生き返り」、「満ち足り」ます。しかし、同時に、「死の陰の谷」があり、「わざわざ」が待ち構えています。私たちを食い尽くそ

うとする「敵」に取り囲まれることもあります。良いこともあれば悪いこともあり、幸いなこともあれば辛いこともあります。

昔の人はそのことを「禍福はあぎなえる縄のごとし」と言いました。これは、中国の最初の歴史書『史記』（紀元前90年頃）からとられたと言われています。「禍福」というのは中国の言葉から来ているのでしょうか。縄を作るときには、束ねた稲藁を水で湿らせ、木の棒などで叩いて柔らかくします。それから、3本くらいの藁を両手に持ち、左右の束を交差させ、ひとひねりして結び目を作ります。この結び目を足の指の間にはさんで手をすり合わせながら、二つの藁束を重ね合わせていきます。藁の先の方まで、縄にしたら新しいワラを接ぎ足して、また手をすり合わせて縄をなっていくのです。縄が二つの藁束をからみあわせて作られるように、人生には、「禍」（わざわい）と「福」（さいわい）の両方がある。人生はそのようなものだから、良いことがあっても、悪いことがあっても、あまり喜んだり、悲しんだりしないで冷静に受け取りなさいという意味で、このことわざは使われます。

詩篇23篇にも幸いと災いが描かれています。この詩篇は、たんに人生の幸・不幸を説くものではありません。幸いの中にも、不幸の中にも、主がおられ、それぞれを導いておられると教えています。幸いの中に神を覚えるのは、難しいことではありませんが、不幸の中に主がおられることを認めるのは、容易いことではありません。

ん。苦しみの時には、「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから」（4節）とあるところを何度も唱えて、主が共にいてくださることを確認するとよいでしょう。主が「死の陰の谷」から「緑の牧場」と「いこいの水のほとり」へと導いてくださることを信じましょう。最終的には「主の家」に導いてくださると確信しましょう。そのとき、私たちの心に感謝と喜びが湧いてくるのです。

昔のことわざは、人生が「禍福」の二本の束でできていると言いますが、聖書は、人生には、幸いと災いの他に、もう一本の束、「神の導き」があると教えています。この三本目の「導き」の束は、信仰がなければ見えませんが、信仰の目で見るとき、私たちの人生の最初から最後まで途切れることなく存在していることが分かります。詩篇 23:3 は「主は…私を…導かれます」と言っ、人生を貫いている神の導きを歌っています。信仰者の人生は、この「神の導き」を見出しながら一步一步を歩んでいくものなのです。

## 二、神の導き

神の導きには、「大」・「中」・「小」があります。「大きな導き」というのは、信じる者が罪と滅びから救われて天に行くことです。また、天に向かう歩みの中で、人格が聖められ、キリストに似た者へと変えられていくことです。さらに、神の愛を知り、キリストの恵みを受けた者が、それを証しすることです。神の導きはみ

な、この人生のゴールを目指しています。神は、これらのゴールに反して私たちを導くことはありません。これらのゴールにしっかり目を向けるとき、神の導きが分かるようになります。

「中くらいの導き」というのは、神が一人ひとりにお与えになった「ミッション」（使命）と、求める者に示される「ビジョン」（展望）のことです。神は、すべての人に、この世にあってなすべき使命を与えておられます。福音を外国に伝える人は、そうしたミッションを受けた人なので「ミッシヨナリー」（宣教師）と呼ばれますが、宣教師だけが使命を受けた人ではありません。実業家になって経済を盛んにする、政治家になって世界の平和のために働く、また、医者になって病気で苦しむ人を助けるなどといったことも「ミッション」（使命）です。そればかりでなく、よい父親、母親、また、隣人、友人となって子どもを育て、人々を助けることも立派な使命です。

しかし、自分の使命が分かっても、それに具体的に取り組まなければ、使命を果たすことができません。医者になるにはよく勉強してメディカル・スクールを卒業し、医師免許を得なければなりません。事業を始めるには人材を集め、資金を調達するなど、プランが必要です。こうした「中・長期のプラン」は一般には「ビジョン」と呼ばれます。さまざまな会社・団体には「ミッション・ステートメント」とともに「私たちのビジョンはこうこうです」という「ビジョン・ステートメント」

があります。ところが、「ミッション」にしる「ビジョン」にしる、もとは聖書の言葉なのです。神を知らない人は、それが神から来ていることを分らないで「ミッション」や「ビジョン」という言葉を使い、それを掲げているのですが、私たち、信仰者は、それ以上に、自分に与えられた「ミッション」をはっきりと知り、「ビジョン」を求めたいと思います。

神の導きには人生のゴール（目的）に導く「大きな」もの、ミッションやビジョンを与える「中くらい」のものとともに、日常の生活の小さな出来事や具体的なことがらを通しての細やかなものもあります。その時は気づかなくても、あとで、それが導きであったと分かることがたくさんあり、皆さんも、毎日、そうしたことを体験していることでしょう。それを、「小さな導き」と呼びますが、「小さい」からといって重要ではないということではありません。そうした導きは神の細やかな愛を私たちに示すものなのです。

太陽系には大きなものも、小さなものも合わせ 5,000 個の星があります。この太陽系は銀河系の一部で、銀河系には太陽系のようなものが 2,000 億あるとされています。すると、銀河系だけで 1,000 兆の星があることになります。大宇宙には銀河系のようなものが数千億あると言われています。1,000 兆は 1 のあとにゼロが 15 個、1,000 億はゼロが 11 個もつく数字ですから大宇宙にはゼロが 26 個もつくほどの数の星があることになります。そんなとてつもない大宇宙を造られた神が、その中のたったひとつ

の星を顧み、そこに住む 80 億人のうちのひとりではない「私」に心をかけ、導いてくださるといふのです。日常生活の中での細やかな導きは、たとえそれを「小さい導き」と呼んだとして、神の偉大な導きの一つなのです。

### 三、義の道に

さて、きょうの詩篇に戻りましょう。詩篇 23:3 で「私を義の道に導かれます」とある「道」には、大通りでなく小さな道を表わす言葉が使われています。しかも、それは複数です。私はイスラエルに行ったとき、小さな丘にいくつもの筋が刻まれているのを見ました。それは獣が通る道でした。動物や家畜が通ったあとにできたものでした。羊は、草を求めて草原や丘を行ったり来たりします。そのためにいくつもの道ができます。季節によって草や水のあるところは変わりますので、羊飼いは、羊を導くのに、いつも同じ道を通りません。数多くのルートから、その時に応じて最善のものを選びます。

私たちの人生においても、様々な道があります。何百年か前には、多くの人、生まれたところで育ち、そこで働き、そこで亡くなっていきました。人生に選択肢は多くはありませんでした。そんなに迷うことなく、決まった道を歩めばよかったです。しかし、現代は違います。社会が複雑になりました。何をすることも数え切れない選択肢があつて、迷ってしまいます。しかも、その中には私たちを生かすものもあれば、駄目にしてしまうものもあります。今日ほど、日々の生活の中で、仕事の

ことで、人間関係で正しい選択や判断が必要とされている時代はないでしょう。「主よ、導いてください」と祈りながら進んでいかななくてはなりません。

聖書は「主は…私を義の道に導かれます」と言っています。聖書で「義」というのは、たんに「正しい」というだけでなく、「成績」や「功績」を表します。創世記15:6に、アブラハムのことについて「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」とありますが、そこでの「義」という言葉には、「クレジット」という意味があります。「クレジット」は銀行のアカウントでは「収入」のことです。私たちはみな「天国銀行」にアカウントがあるのですが、かつては、「クレジット」どころか、「デット」（借金）だらけでした。ところが、アブラハムの信仰を「クレジット」にしてくださった神は、イエス・キリストを信じる者に、イエス・キリストが持つておられる莫大な「クレジット」（義の財産）をその人のアカウントに「クレジット」として振り込んでくださったのです。神が導いてくださる「義の道」とは、神からの「クレジット」が増し加わっていく道なのです。

この「義」は、私たちが自分の力で稼いだものではありませんから、私たちはそれを自分のものとして誇ることはできません。恵みによって与えられたものですから、ただ、神を誇るのです。聖書は、「御名のために、私を義の道に導かれます」と言っています。「御名のために」は日本語では「御名にふさわしく」（新共同訳）

とも、「御名のゆえに」（新改訳 2017）とも訳されていますが、多くの英語訳では“for the sake of his name”と訳されます。New Living Translation では意味を取って“bringing honor to his name”（神の御名に榮譽をもたらすため）となっています。神は「義」なるお方であり、私たちにその「義」を分け与えようとして、「義の道」に導いてくださるのですが、それは恵みのゆえですから、私たちが神の導きを求め、その道に歩むのは決して自分を誇るためではありません。自分がひとりで判断していたなら、きっと間違った道に歩いていったに違いないのです。そんな私たちが、神の御名のゆえに、その愛、恵み、あわれみのゆえに、正しい道に導かれています。私たちはこのことを喜び、感謝し、神の御名をほめたたえながら歩むのです。

「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。」私たちの人生には神の導きがあります。神を信じて、そのことを知りましょう。それは私たちに人生の目的を与えます。地上での使命を教えます。ビジョンを示します。神に祈り求めて、それを示していただきましょう。主は私たちを「義の道」に導いてくださいます。主の導きに従い、あふれるばかりの祝福をいただきましょう。

### （祈り）

私たちの羊飼いである主なる神さま、この週も「主は…私を…導いてくださる」と信じて歩む私たちとしてください。そして、あなたの導きに従うことによって、あ

あなたの恵みを知り、あなたの御名をほめたたえる者として  
ください。イエス・キリストのお名前です。



**Penguin Club**  
[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)